

第1次北サッカラ遺跡踏査概報

河合 望^{*1}・吉村 作治^{*2}・近藤 二郎^{*3}
高橋 寿光^{*4}・米山 由夏^{*5}・石崎 野々花^{*6}

A Preliminary Report of the First Season of the Archaeological Survey at North Saqqara

Nozomu Kawai^{*1}, Sakuji Yoshimura^{*2}, Jiro Kondo^{*3},
Kazumitsu Takahashi^{*4}, Yuka Yoneyama^{*5}, and Nonoka Ishizaki^{*6}

Abstract

The Japanese Expedition to North Saqqara conducted the first season of the archaeological survey at North Saqqara in May, 2016. This project aims to search the location of the New Kingdom cemeteries in North Saqqara which have not been comprehensively investigated up to today. In the first season, the team conducted an archaeological reconnaissance throughout North Saqqara by using GPS device to plot the position of the artifacts dating to the New Kingdom. As the result of our survey, several areas have been detected as possible locations of the New Kingdom cemeteries at North Saqqara. However, most remarkable area is the area to the north of the Teti Pyramid North Cemetery. This area of 100,000m² probably contains a number of New Kingdom cemeteries dating from the early Eighteenth Dynasty to the Ramesside period along with the Old Kingdom tombs. It is hoped that more detailed information will be obtained in these areas by undertaking geophysical prospection and mapping in the next season.

1. はじめに

古代エジプト新王国時代（前1550年～前1069年頃）における主要な墓地として知られるのは、上エジプトのテーベ（現在のルクソール）西岸のネクロポリスである。テーベ東岸には、当時の国家神であったアメン神の総本山であるカルナク神殿とルクソール神殿などの関連する神殿群があり、宗教の中心であった。西岸にはディール・アル＝バフリーのハトシェプスト女王葬祭殿（記念神殿）などの歴代の王の葬祭殿が造営され、その背後のピラミッド状をしたアル＝クルンの岩山の麓に新王国時代の歴代の王が埋葬された「王家の谷」を始めとする広大な墓域が形成された。

一方、新王国時代の行政の中心であった北部のメンフィスの新王国時代の墓地については、メンフィス・ネクロポリスに位置するサッカラ遺跡やダハシュール北遺跡などにおいてその存在が明らかになりつつあ

* 1 金沢大学新学術創成研究機構准教授

* 2 東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授

* 3 早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長

* 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員講師

* 5 鶴見大学大学院文学研究科博士後期課程

* 6 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

* 1 Associate Professor, Institute for Frontier Science Initiative,
Kanazawa University

* 2 President, Higashinippon International University / Professor
Emeritus, Waseda University

* 3 Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University /
Director, Institute of Egyptology, Waseda University

* 4 Visiting Lecturer, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon
International University

* 5 Doctoral student, Department of Cultural Properties, Tsurumi
University

* 6 MA Student, Department of Archaeology, Waseda University

る。特にサッカラ遺跡では、ウナス王のピラミッド参道の南側、サッカラ台地の東側に位置する猫の墓地ブバスティオン、テティ王のピラミッドの周辺、現在のアブ・シール村に隣接する北サッカラの台地の東側の崖下、アブ・シール南丘陵遺跡頂部などで新王国時代の墓が確認されているが、サッカラの新王国時代の墓地については、欧米の博物館、美術館に収蔵されている膨大な記念物、副葬品などの遺物が由来する墓の所在が不明のままであり、今後それらが発見される可能性が高い。また、G.T. マーティン (Martin) は、サッカラにおける特に第18王朝前期から中期にかけての墓地は不明のままであり、北サッカラの台地の東側の崖に岩窟墓の形態の墓の墓地が存在すると推測している (Martin 1991: 26-27)。これらの未発見の新王国時代の墓地が明らかになれば、当時のメンフィスの人々の葬墓制のみならず、技術、社会、あるいは高官の役割、業績等も明らかになることが期待される。

このような問題意識のもとに、科学研究費補助金基盤研究 (B) (海外学術調査) (研究代表者: 河合 望) を賜り、未発見の新王国時代の墓地が埋蔵されていると想定される北サッカラ地域での調査研究を開始した。本研究課題は、北サッカラ遺跡において新王国時代の墓地の発掘調査を行い、研究を遂行することを目的としているが、まず発掘地選定のための踏査を行なった。これまで2015年9月に予備調査を行い、エジプト考古省より正式なサーベいの許可が下りたことを受けて、2016年の5月に北サッカラ遺跡の第1次踏査を実施した¹⁾。本稿では、その概要について報告する。

2. サッカラにおける新王国時代の墓地について

サッカラ遺跡における新王国時代の墓地は、前述のように、これまでに、①ウナス王のピラミッドの参道の南に位置する第18王朝から第3中間期に年代づけられる墓地、②サッカラ台地の東側に位置する猫の集団墓地、ブバスティオンに位置する第18王朝中期から第19王朝に年代づけられる墓地、そして、③テティ王のピラミッドの北側に位置する墓地の主に3カ所が知られている。

①のウナス王のピラミッドの参道の南側では、英国とオランダを中心とする調査隊 (現ライデン博物館・トリノ博物館合同調査隊) によって、1970年代後半から第18王朝末のトウトアंकアメン (ツタンカーメン) 王時代の高官、ホルエムヘブ、マヤラの墓が発見され (Martin 1990)、その後アマルナ時代からラメセス2世の時代までの高官墓と新王国時代から第3中間期までの単純埋葬などが発見されている。その北東部ではカイロ大学の調査隊によってラメセス2世の宰相ネフェルレンペトの墓を始めとするラメセス2世の治世の高官墓が数多く発見されている (Tawfik 1990)。これまで調査された当該地区の新王国時代の墓は、ごく一部にすぎず、現在も発掘調査が継続されている。

②のブバスティオンでは、フランス国立科学研究センターのA.P. ジビー (Zivie) が調査を行っており、これまでにアメンヘテプ3世の宰相アペルエル (アペリア)、トウトアंकアメン王の乳母マヤ、ラメセス2世時代の外交官ネチェルウイメスらの墓が発見された (cf. Zivie 2008)。当該地区では、トトメス3世とハトシェプスト女王の共同統治時代からラメセス2世の治世の高官の岩窟墓が発見されている。

③のテティ王のピラミッドの周辺には、前述の2箇所よりは比較的小規模ではあるが、新王国時代の墓が多数存在することが知られている (cf. Quibell and Hayter 1927; Hawass 2011)。さらに、現在のアブ・シール村に隣接する北サッカラの台地の東側の崖下にはラメセス2世時代の高官ナクトミンらの墓が確認されており (Youseff 2011; Daoud et al. 2016)、早稲田大学調査隊が調査を行っているアブ・シール南丘陵遺跡頂部ではラメセス2世の王子カエムワセトの娘とみられるイシスネフェルトの墓が発見された (吉村他 2010a, 2010b; Kawai 2012)。

しかし、サッカラの新王国時代の墓地については、欧米の博物館、美術館に収蔵されている膨大な記念物、副葬品などの遺物の本来の出土地が不明であることから未発見の場所が存在することが指摘されてい

る。マーティンは、北サッカラの台地の東側の崖に多数の岩窟墓があると推測しているが、特に第18王朝前期から中期にかけての墓地の所在は不明のままである (Martin 1991: 26-27)。また、メンフィスのプタハ神の神官の墓地やサッカラに埋葬されたとされる王族の墓の所在も明らかではない。例えば、アメンヘテプ3世の長子でプタハ大司祭であったトトメス王子やラメセス2世の第4王子のカエムワセト王子やメルエンプタハ王の母であるイシスネフェルト王妃の墓の所在も不明である。このように、サッカラには、依然として新王国時代の未発見の墓地が埋蔵されている。

3. 北サッカラの新王国時代の墓地の研究史

調査の対象とする北サッカラ地域における新王国時代の墓地としては、前述のように、これまでの発掘調査によって、ブバステイオン (Zivie 2008)、テティ王のピラミッドの周辺 (Quibell and Hayter 1927)、北サッカラの台地の崖における岩窟墓の例などが知られていた。それ以外の場所については、エジプト学の草創期から遺跡地図の作成が試みられてきたが、包括的な遺跡地図は存在しておらず、全体の遺跡分布の様相は把握されていなかった。

従来の遺跡地図としては、ドイツの K.R. レプシウス (Lepsius) が残した地図 (図1) (Lepsius 1849-1859)、フランスの J. ド・モルガン (De Morgan) によるサッカラを含むアブ・シールからダハシュールまでの遺跡地図 (図2) (De Morgan 1897) などがあり、測量的には正確さに欠けるものの、墓の分布に関する貴重な情報を提供している。ド・モルガンの遺跡地図では、墓の位置が地図上に示されており、それぞれの墓の色で時代を分けて示している。墓の年代の根拠については全く説明が記されていないが、おそらく遺物の年代から推測したものと思われる。下記の踏査では、この遺跡地図に記された新王国時代の墓の分布を手掛かりに踏査を行い、精密さには欠けるものかなり有益な情報であった。20世紀になると、北サッカラでは、英国隊がテティ王のピラミッドの北墓地で発掘調査を実施したが、調査の対象は古王国時代あるいは中王国時代が中心であり、新王国時代の墓についての記述はあまり割かれていない。より正確な当該地区の地図は、1977年にフランスの Consortium SFS.IGN が作成した、エジプト住宅省の縮尺 1 / 5000 の地図のシート H22 と H23 であるが、遺跡地図を目的としたものではないので、遺跡の情報は含まれていない。

近年、イタリア隊による北サッカラ遺跡の保存管理を目的とした地図 (Ago et al. (eds.) 2003) や、英国隊による物理探査の地図 (Mathieson and Ditter 2007) などが発表されているものの、実際の踏査による遺構や遺物の分布に基づいた遺跡地図は存在していない。本格的な調査に先立って、まずは北サッカラ地域全体の遺跡分布を踏査によって把握し、その中から新王国時代の墓地の所在を明らかにすることが課題と認識された。

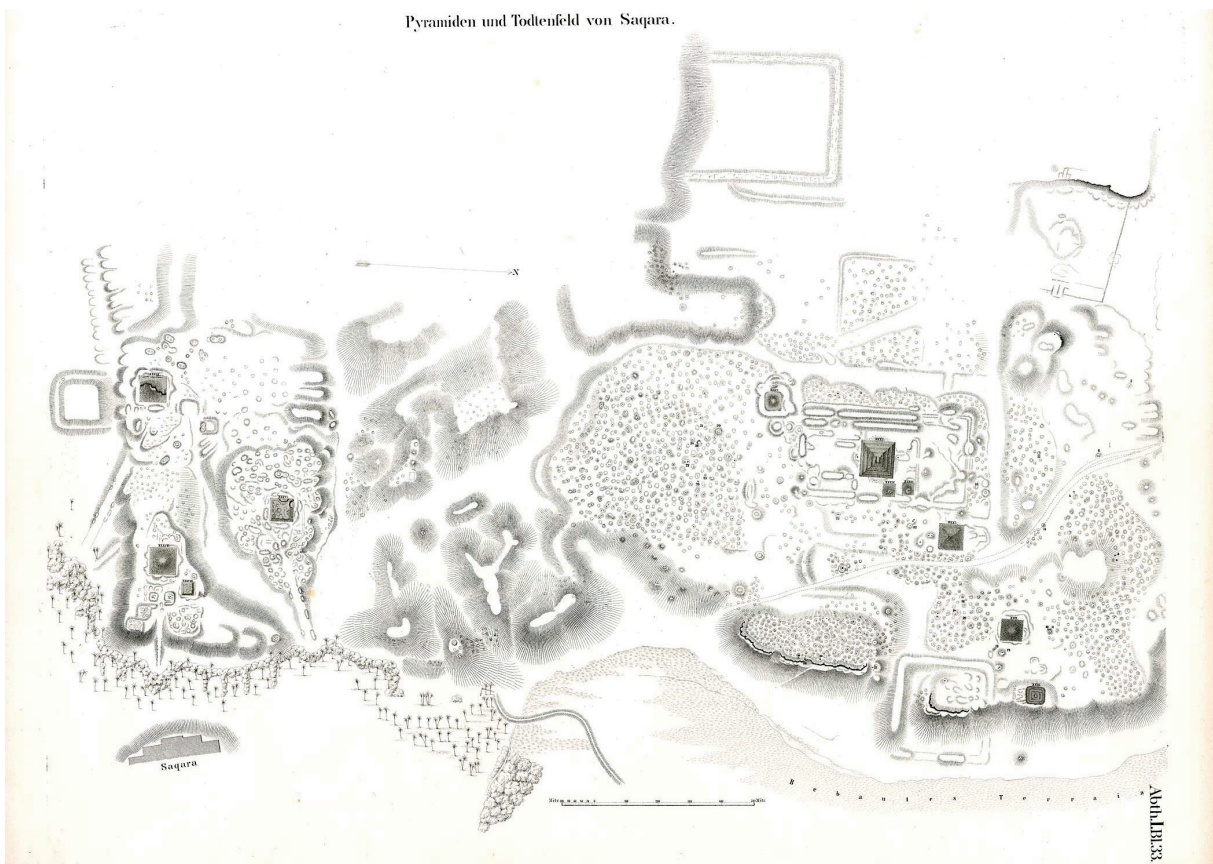


図1 レプシウスによるサッカラ遺跡地図 (Lepsius 1849-1859: Abth.I.BI.33)
 Fig.1 Map of Saqqara by Lepsius (Lepsius 1849-1859: Abth.I.BI.33)



図2 ド・モルガンによるサッカラ遺跡地図 (De Morgan 1897: 10)
 Fig2 Map of Saqqara by De Morgan (De Morgan 1897: 10)

4. 北サッカラにおける踏査

(1) 踏査の方法

2016年5月4日から17日にかけて北サッカラにて踏査を実施した。踏査を行なった区域は、東にブバステイオン、西にセラペウムの南側、北にアブ・シール湖を結ぶ約870,000m²の三角形のエリアである(図3)。踏査では、ド・モルガンの地図とイタリア隊の報告書の地図を手掛かりに、隊員が横一列になって地表面を観察しながら歩行した。踏査では、特徴的な遺構および遺物を撮影・記録すると同時に、位置をGarminのGPS受信機(Garmin GPSMAP 64S)で記録した。なお、踏査にあたっては、特に研究課題の目的である新王国時代の遺物を注視し、新王国時代の遺物に関しては、認識されたものは全て記録した。GPS受信機で記録されたデータは、Google Earthにコンバートし、Google Earthの衛星画像上に遺物と遺構の分布を図示できるようにした(図4,5)以下では、踏査を行った各地域での観察の概要を記す。

(2) セラペウムからアブ・シール湖までの地域

まず、踏査はプタハ神の聖牛アピスの墓地であるセラペウム付近から開始し、アブ・シールのワディ沿いに北上する進路をとった(写真1)。セラペウムは、プタハ神の聖牛アピスが埋葬された墓地で、新王国時代第18王朝からプトレマイオス朝時代まで利用された長い歴史を持つ動物墓地である。セラペウムでは、特に末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に活発な活動がみられ、地表面に散布する土器片は末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の大部を占めていた。いわゆるギャラリーと呼ばれる部分の南東に位置する新

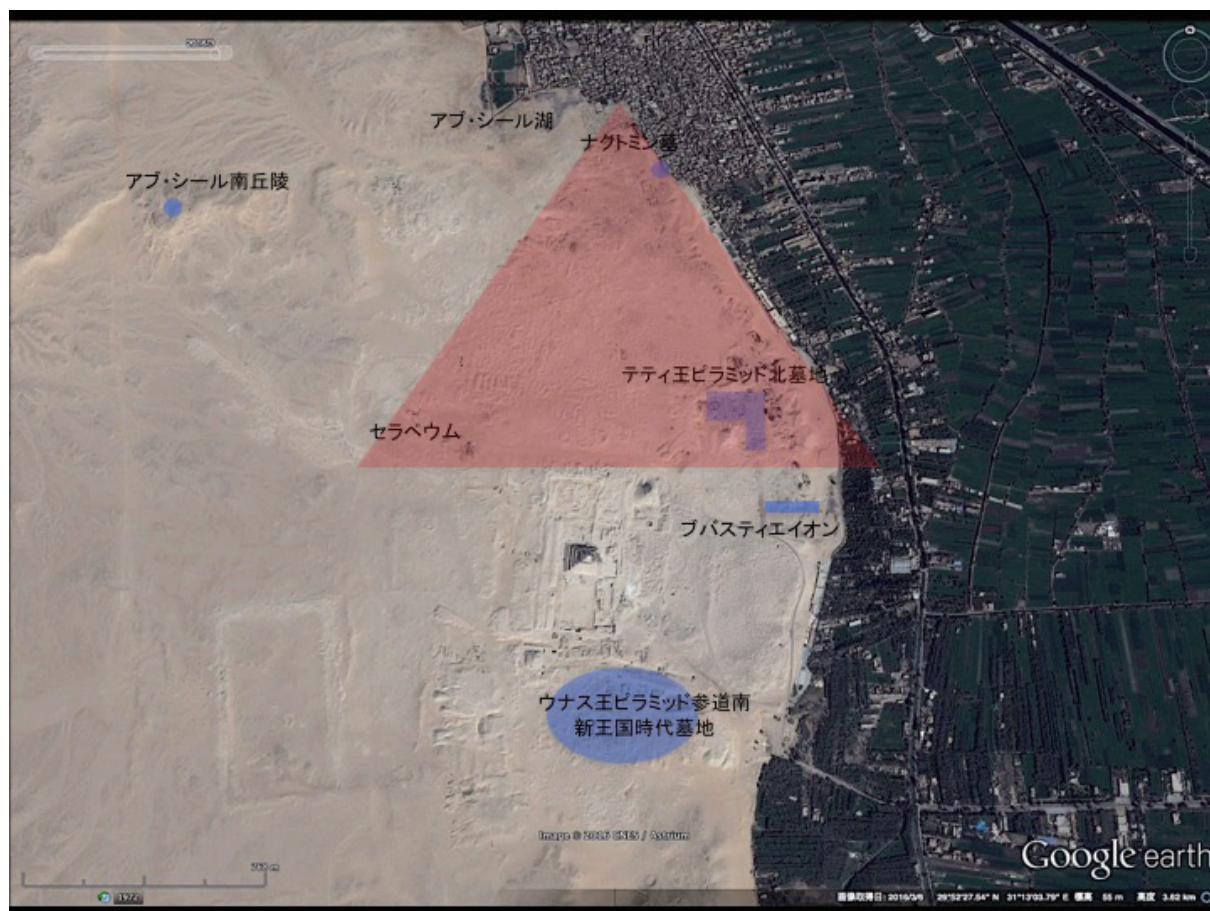


図3 北サッカラ踏査エリア
Fig.3 Survey area at North Saqqara

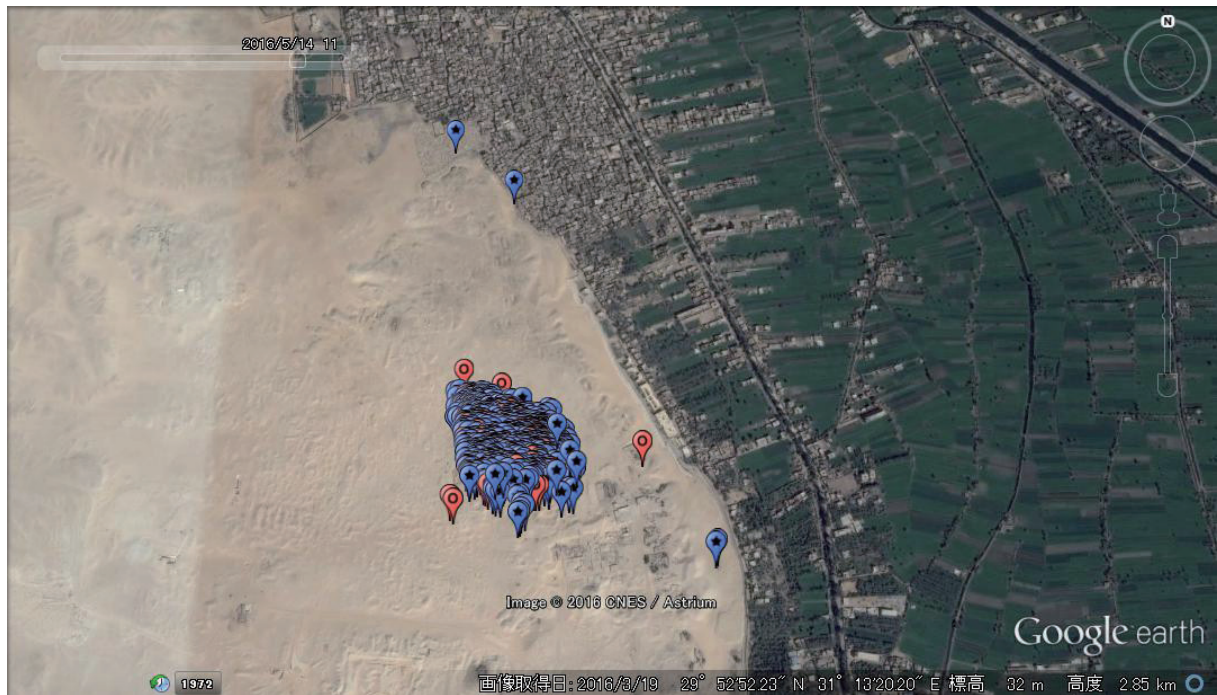


図4 北サッカラの新王国時代の遺物と遺構の分布

Fig.4 The GPS data of New Kingdom structures and objects converted to the Google Earth, at North Saqqara: Blue symbol shows structure and red symbol shows object



図5 テティ王ピラミッド北側エリアの新王国時代の遺物と遺構の分布

Fig.5 The GPS data of New Kingdom structures and objects converted to the Google Earth, at the area to the north of the Teti Pyramid North Cemetery: Blue symbol shows structure and red symbol shows object



写真1 セラベウムの北から北上して踏査を行う隊員
Pl.1 The archaeological survey at the north of Serapeum

王国時代第18王朝後期のアピス牛の墓地の周辺には新王国時代第18王朝の土器片の散布が期待されたが、我々の踏査では確認できなかった。

その後、アブ・シールのワディの東側の台地の際を北上したが、古王国時代第5王朝のマスタバ墓群、末期王朝時代の犬の集団墓地、アヌビエイオンの遺構、第3王朝時代のマスタバ群の間には、新王国時代に年代付けられる遺物はほとんど見当たらなかった。

(3) アブ・シール湖からサッカラ台地東端部

アブ・シールのワディを北上し、古代アブ・シール湖の位置までの間には新王国時代の土器は全く確認できなかったが、北サッカラの台地の突端部と現代の墓地の間の北側斜面からは人形木棺片や新王国時代の土器片が確認された。踏査に同行したサッカラ査察局のチーフインスペクター、ムハンマド・ユーセフ氏によれば、現代の墓地の中に新王国時代の墓が存在し、我々もシャフトのある場所まで案内された(写真2)。

さらに、現代の墓地の南から北サッカラ台地の東側の崖際を南下したが、第19王朝ラメセス2世時代の高官ナクトミンの墓の周辺では同時代の遺物は確認できなかった(写真3)。北サッカラ台地の東側の崖では、岩盤が露頭している数箇所が主要な新王国時代の墓地としてブバスティオンに様相が類似しており、風性砂層の堆積の下に岩窟墓が存在する可能性が高いが、新王国時代の土器片はほとんど表採できなかった。これは、風性砂層と過去の発掘調査の排土の堆積が厚いことによるものであろう。崖下の低位砂漠では、新王国時代の土器が散布している場所も看取され、特に現地住民の聖所とされている「ユーセフの牢獄」と呼ばれている場所には、数基のシャフト墓の存在が確認された(写真4)。



写真2 現代の墓地内にあるシャフトと考えられる遺構
Pl.2 The possible shaft tomb among the modern cemetery

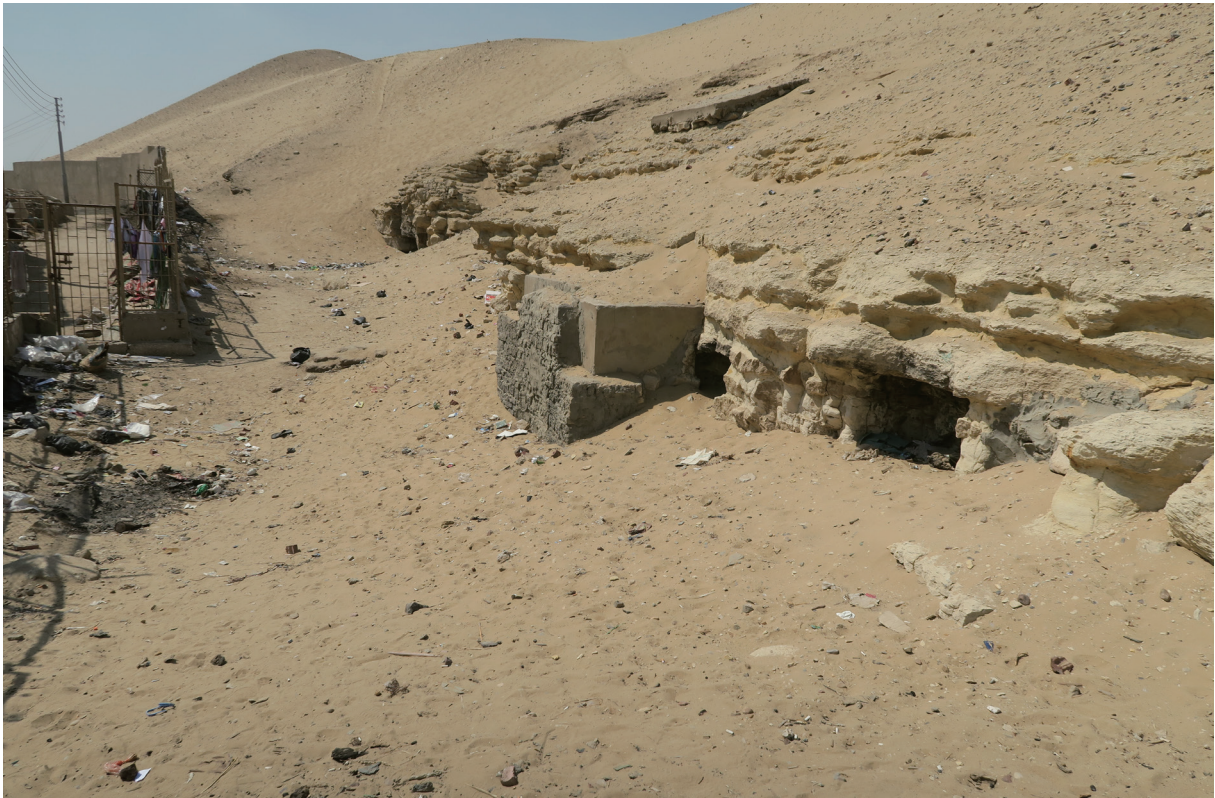


写真3 ナクトミン墓（レンガに覆われている部分が入口）とその周辺
Pl.3 The tomb of Nakhtmin (the entrance is covered by bricks) and its vicinity



写真4 「ユーセフの牢獄」
Pl.4 The so-called “Jail of Youssef”

(5) テティ王ピラミッド北墓地からセラベウムの中の地区

台地の上部では、すでに新王国時代の墓の存在が知られているテティ王のピラミッド北墓地の西からセラベウムにかけて東西方向に踏査を行った。このエリアは西に向かうにつれて次第に末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の土器の密度が濃くなる傾向がみられた。おそらく、セラベウムの周辺に末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の遺構が多いことを示すものと考えられる。

その後、テティ王のピラミッドの北側から東西方向に踏査を行った。このエリアは、前述のド・モルガンの遺跡地図で新王国時代の墓が多数存在することが記録されているが、具体的な情報についてはほとんど知られておらず、これまで考古学的な発掘調査も実施されていない。近年、I. マチソン (Mathieson) によって物理探査が実施されたが、長辺を南北に持つ矩形の古王国時代のマスタバ墓の存在が明らかとなっている (Mathieson and Ditter 2007)。

我々の踏査の結果、ド・モルガンの遺跡地図の新王国時代の墓の分布を裏付けるかのように、テティ王のピラミッドの北西に位置する舌状の丘陵に約 100,000m² の規模にわたって新王国時代の遺物が集中している地区が明らかとなった (写真5)。この地区は大規模な盗掘を受けているものの、これまで考古学的な発掘調査が行われていない新王国時代の墓地と見られる。確認された遺物の傾向としては、古王国時代第4王朝の土器が当該地区全体で検出され、新王国時代の土器は第18王朝初期から中期の土器が当該地区の東側に集中し、第18王朝後期からラメセス朝の土器が西側に集中する傾向がみられた。おそらく、この地区では古王国時代に墓地が形成され、長い断絶の後、その上に東側から徐々に新王国時代の墓が造営されたと推定された。当該地区には約500ヶ所のクレーター状の窪みが観察され、これらはシャフトや壁体などの痕跡とみられる (写真6)。舌状の丘陵の西側には、近年盗掘によって再発見され、考古省が発掘調査を行った古王国時代のカエムメスウのマスタバ墓の内部および周辺には新王国時代に年代付けられるとみられるシャフ

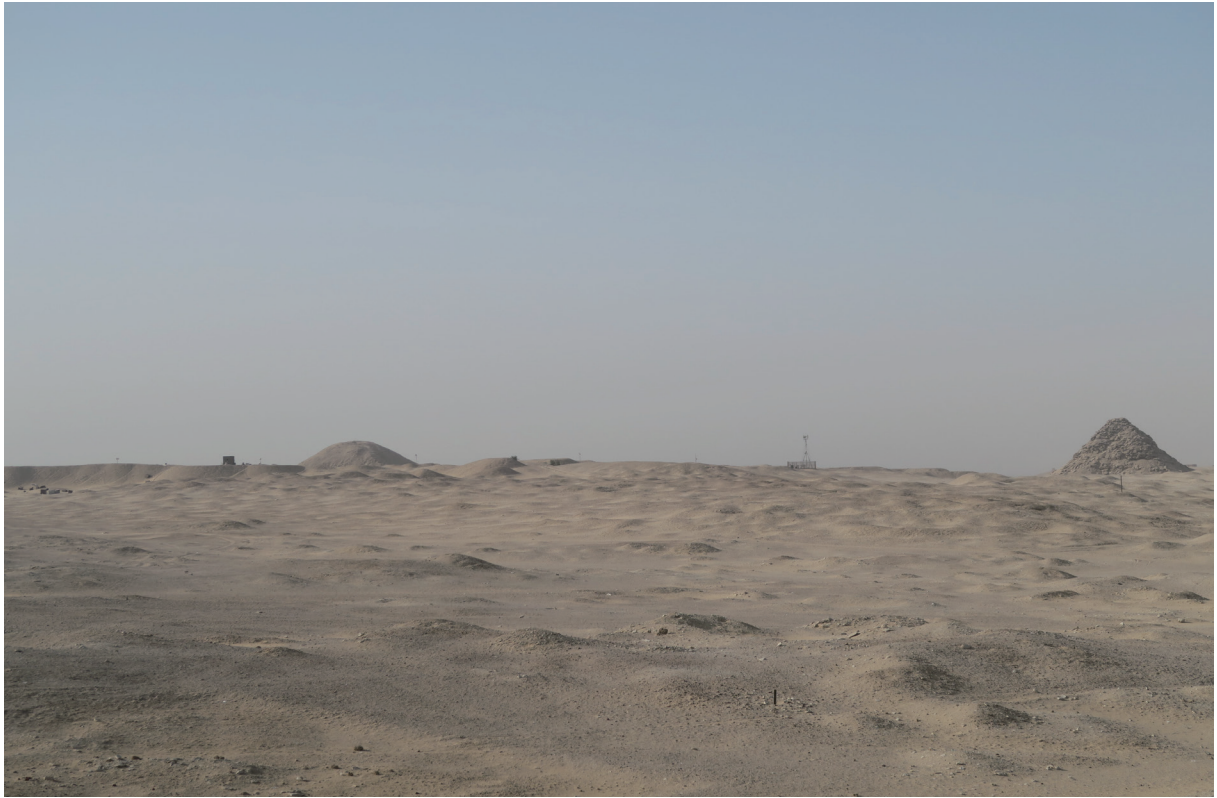


写真5 新王国時代の墓地が確認された舌状の台地
Pl.5 The area to the north of the Teti Pyramid North Cemetery

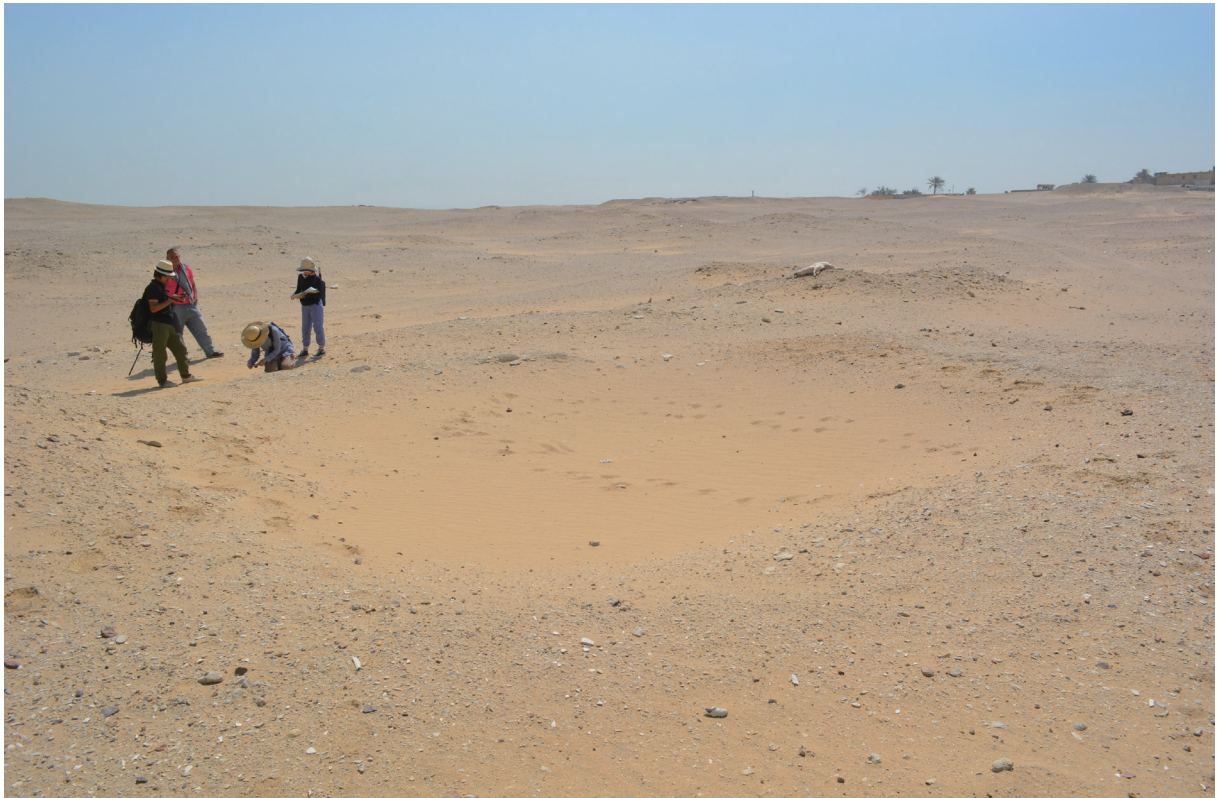


写真6 遺構の痕跡と思われるクレーター状の窪み
Pl.6 The depression which probably indicate shaft tomb

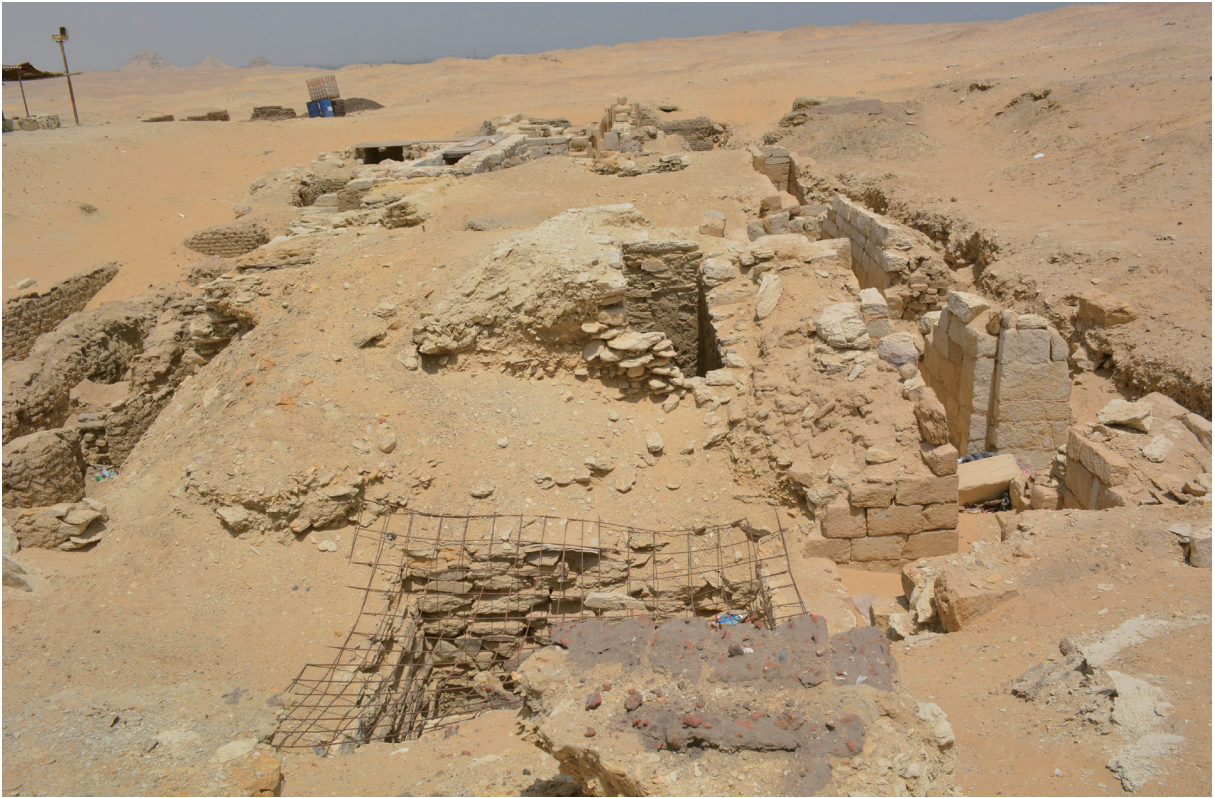


写真7 カエムメスウのマスタバ墓（中央は新王国時代のシャフト）
Pl.7 The mastaba of Kaemmesw of the Old Kingdom, and the shaft at the center is probably dated to the New Kingdom



写真8 カエムメスウのマスタバ墓付近で確認された新王国時代の土器片
Pl.8 The fragments of New Kingdom pottery vessels which were recognized at the vicinity of the mastaba of Kaemmesw

トが散在し（写真7）、第18王朝から第19王朝に年代付けられる特徴的な土器も多く確認された（写真8）。

北サッカラの台地の上部では、さらに北部と北西方面で踏査を行ったが、新王国時代の遺物はほとんど認められなかった。

5. 踏査で確認された新王国時代の主な遺物

(1) 土器²⁾

今期調査では、特にテティ王北墓地の北側の墓域にて、古王国時代および新王国時代に特徴的な土器を確認することができた。古王国時代の土器は、主に第4王朝に年代づけられ、墓域全体に広がっている。また新王国時代の土器は、第18王朝初期から中期の土器が墓域の東側、第18王朝後期の土器が墓域の西側に見られた。以下に詳細を記載する。

①古王国時代の土器

今期調査で確認された古王国時代第4王朝に年代づけられる土器としては、いわゆる「ビール壺」と呼ばれる壺形土器（写真9）、いわゆる「メイドゥーム・ボール」と呼ばれる碗形土器（写真10）が挙げられる。

ビール壺（写真9）は類例がダハシュールの赤ピラミッド（Köpp 2009: Abb.6.Z501）、ダハシュールのネチェル・アペルエフのマスタバ墓（Alexanian 1999: Abb.54.M28-33）などにある。また、メイドゥーム・ボール（写真10）は、類例がダハシュールの赤ピラミッド（Köpp 2009: Abb.5.Z713）、ダハシュールのネチェル・アペルエフのマスタバ墓（Alexanian 1999: Abb.60.M111-113）、アブ・ロワシュ（Marchand 2009: no.Ifao225）などにある³⁾。



写真9 ビール壺
Pl.9 Beer jars



写真10 メイドゥーム・ボール
Pl.10 Maidum bowl

②新王国時代の土器

第18王朝初期から中期に年代づけられる土器としては、いわゆる「ビール壺」と呼ばれる壺形土器（写真11）、長頸壺形土器（写真12）、彩文土器（写真13-15）、赤色磨研土器（red lustrous wheel-made ware）（写真16）、アンフォラ（写真17）などが挙げられる。

ビール壺（写真11）は類例がディール・アル＝ベルシャ（Bourriau et al. 2005: Fig.30）、アビュドス（Budka 2006: Fig.2.5-7）などにある。長頸壺形土器（写真12）は類例がテル＝ヘブア（Dorner and Aston 1997: Pl.II.10, 11）、アビュドス（Budka 2006: Fig.9.13）などにある。彩文土器（写真13）は類例がディール・アル＝ベルシャ（Bourriau et al. 2005: Fig.9.3）、トトメス3世の外国人妻の墓（Lilyquist 2003: Fig.68.c-f）などにある。彩文土器（写真14）は類例がトトメス3世の外国人妻の墓（Lilyquist 2003: Fig.73.b）、セティ1



写真 11 ビール壺
Pl.11 Beer jar



写真 12 長頸壺形土器
Pl.12 Long-necked jar with incised bands



写真 13 彩文土器
Pl.13 Long-necked jar with black bands



写真 14 彩文土器
Pl.14 Polychrome painted long-necked jar



写真 15 彩文土器
Pl.15 Polychrome painted jug



写真 16 赤色磨研土器
Pl.16. Red-polished jar, so-called "Red lustrous wheel-made ware"

世葬祭殿 (Mysliwiec 1987: nos.31, 32) などにある。彩文土器 (写真 15) は類例が王妃の谷 (Lecuyot 1996: Pl.I.Fig.a)、ヌビア (Holthoer 1977: Pl.53.3) などにある。赤色磨研土器 (写真 16) は類例がディール・アル＝ベルシャ (Bourriau et al. 2005: Fig.29)、ヌビア (Holthoer 1977: Pl.70.5) などにある⁴⁾。アンフォラ (図 17) は Marl D 胎土であり、類例はトトメス 3 世の外国人妻の墓 (Lilyquist 2003: Figs.75.a-e, 76.a, b, 77.a, b) などにある⁵⁾。

類例などから、これらの土器は第 18 王朝初期から中期に年代づけられる。これらの土器はテティ王の北側の墓域でも、主に東側から発見される傾向にある。

一方で、テティ王の北側の墓域の西側からは第 18 王朝後期に年代づけられる青色彩文土器が発見されている。青色彩文土器 (図 16) は、類例がサッカラのホルエムヘブ墓 (Bourriau et al. 2005: Fig.24.127; Aston, B. 2011: Fig.IV.26.208-211)、マヤ墓 (Aston, D. 2011: nos.43-51) にあり、第 18 王朝後期のトゥトアンクアメン王からホルエムヘブ王時代に年代づけられる。



写真 17 アンフォラ
Pl.17 Amphora



写真 18 青色彩文土器
Pl.18 Blue painted pottery

(2) 陶棺片

陶棺片は、舌状の丘陵の西側部分で確認された。顔の左半分を示しており、顎髭をたくわえている (写真 19)。鼻と耳の部分が欠損しているが、目、眉、口の部分が認められるので、ある程度の特徴は把握できる。顔の部分は首の部分より高く、膨らみを呈している。目と眉の部分は僅かな凹凸で表現されており、口はやや開いたような形状をしている。彩色は認められない。似たような顔面の仕上げを示す陶棺は、テル・アル＝ヤフディーヤやイフナスヤ・アル＝マディーナ (ヘラクレオポリス) などの出土例が類例としてあり、新王国時代に年代付けられている (Cotelle-Michel 2004: 120, 141)。

(3) 石灰岩製レリーフ片

石灰岩のレリーフ片が、数カ所で散乱していたが、特に図像が把握できたのはこのウジャト眼が刻されたものである (写真 20)。破片の厚さから、壁面装飾というよりはステラなどの一部と考えられる。年代はおそらく新王国時代であろう。

(4) スカラボイド

このスカラボイドは、テティ王ピラミッドの北西に位置する舌状の丘陵の東側の麓で表採されたものである (写真 21)。スカラボイドとは護符の一種で裏面は平坦になっておりスカラベと同じであるが、表はフンコロガシの形状ではなく、ハリネズミやカモなどの形状をしている。このスカラボイドはカモの形状をし



写真19 陶棺
Pl.19 Pottery coffin



写真20 石灰岩レリーフ片
Pl.20 A fragment of limestone relief



写真21 トトメス3世即位名入りスカラボイド
Pl.21 Steatite scaraboid bearing the phenomen of Thutmose III on undersurface

ており、非常に精巧に製作されている。寸法は高さ0.4cm、幅0.6cm、長さ0.9cmである。ステアタイト製で緑色の釉薬が塗られている。平坦面には、ヒエログリフで、*ntr nfr Mn-hpr-R*「良き神、メンケペルラー」とあり、第18王朝のトトメス3世の即位名であることがわかる。つまり、このスカラボイドは第18王朝のトトメス3世の時代に年代付けられると推定される。スカラベではあるが、ハトシェプスト女王とトトメス3世の共同統治時代に緑色の釉薬のかかったステアタイト製のものが数多く知られている (Roehrig 2005: 94, 142-143)。

(5) その他

以上の遺物の他に木棺片と思われる木材片が多数確認されたが、装飾があまり残存しておらず、年代も確定できないので、本稿では割愛したが、人形棺の形状の破片があり新王国時代のものと思われる。

6. おわりに

今回の踏査によって北サッカラにおける新王国時代の墓地の分布の概要が把握できた。北サッカラ台地の東側の崖では、ナクトミンの墓とその周辺、岩盤が露呈している数箇所、「ユーセフの牢獄」の周囲が候補地として挙げられる。台地上では、テティ王のピラミッドの北側に隣接する墓地の北から北西方面に舌状に伸びる小丘陵が新たに新王国時代の墓地として確認された。この墓地はド・モルガンの地図で記録されているものの、表採できる遺物の内容、年代などの情報はこれまで不明であった。今回の踏査では、この新王国時代の墓地には第18王朝初期から第19王朝までの墓が埋蔵されている可能性が高いことが明らかとなった。

マーティンは、その著 *The Hidden Tombs of Memphis* の中で、次のように記している。「Though population statistics for Memphis in the early and middle parts of the Eighteenth Dynasty are totally lacking there is no reason to doubt that the city was large, and one would expect to see many tombs of this era in the nearby Saqqara cemeteries. Yet, as I have just pointed out, the earliest known tomb of the New Kingdom on the high desert dates from the reign of Amenophis III.」(Martin 1991: 26)。しかし、彼の予想とは裏腹に、今回の踏査によって、北サッカラの台地上にこれまで所在の明らかでなかった第18王朝初期から中期の墓を含む新王国時代の墓地の存在が確認されたことは、非常に意義が大きいと言える。今後は、これらの箇所ですらに物理探査と微地形測量等を実施し、今後の発掘調査につなげていきたいと考えている。

謝辞

本調査は、科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「エジプト、サッカラ遺跡における新王国時代の墓の調査研究」(研究代表者、河合 望: 課題番号 15H05163)による成果である。

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーレド・アル＝アナニー閣下(博士)、外国調査隊管轄事務局長ハニー・アブー・アル＝アズーム氏、サッカラ査察局長アラ・アル＝シャハータ氏、同副局長サブリー・ファラグ氏、チーフインスペクターのムハンマド・ユーセフ氏およびハムディ・アミン氏、我々の調査の査察官ターメル・ラガブ・アブダッラー氏を始めとする方々に多大なご協力を頂いた(肩書きは調査時のもの)。カイロでは、早稲田大学エジプト学研究所カイロ・オフィスの吉村龍人氏、ムハンマド・アシュリー氏に考古省との渉外などで大変お世話になった。

GIS(地理情報システム)については、(有)三井考測の三井 猛氏および梅田由子氏にご指導いただいた。ここに記して感謝の意を表する。

註

- 1) 調査の参加者は以下の通りである。考古班: 近藤二郎、河合 望、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、現地渉外: 吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 2) 土器の胎土に関しては10倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った(Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130-132)。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係の数値に基づいた器形分類をもとに、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した(Aston, D. 1998: 41-52)。
- 3) メイドゥーム・ボールは器形と胎土で2つのグループに分けることができ、マール・クレイ胎土の土器には肩部に稜線が見られる。これに対し、ナイル・クレイ胎土では、肩部が丸みを帯びている。前者がメイドゥーム・ボールの初期の段階、後者が後期の段階を示すとされている(Wodzińska 2007: 299)。踏査で発見されたメイドゥーム・ボールはマール・クレイ胎土に肩部に稜線が見られることから、初期の段階に位置づけられる。
- 4) 赤色磨研土器の年代については、以下を参照(Eriksson 1993)。
- 5) Marl D 胎土のアンフォラの年代については、以下を参照(Aston, D. 2004: 187-191)。

参考文献

- Alexanian, N.
1999 *Dahschur II, Das Grab des Prinzen Netjer-aperef. Die Mastaba II/1 in Dah-schur, AVDAIK 56*, Mainz am Rhein.
- Aston, B.G.
2011 “The Pottery”, in Raven, M.J., Verschoor, V., Vugts, M. and Walsem, R.v. (eds.), *The Memphite Tomb of Horemheb Commander in Chief of Tutankhamun. V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with some Notes on the Tomb of Tia*, Turnhout, pp.191-303.
- Aston, D.A.
1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. Teil 1. Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.
2004 “Amphorae in New Kingdom Egypt”, *Ägypten und Levante XIV*, pp.175-214.
2011 “Blue Painted Pottery of the Late Eighteenth Dynasty. The material from the Tomb of Maya and Meryt at Saqqara”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne 9*, pp.1-35.
- Bourriau, J., De Meyer, M. Op De Beeck, L. and Vereecken, S.
2005 “The Second Intermediate Period and Early New Kingdom at Deir al-Barsha”, *Ägypten und Levante XV*, pp.101-129.
- Budka, J.
2006 “The Oriental Institute Ahmose and Tetisheri Project at Abydos 2002-2004: The New Kingdom Pottery”, *Ägypten und Levante XVI*, pp.83-120.
- Dorner, J. and Aston, D.
1997 “Pottery from Hebua IV/ South: Preliminary Report”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne 5*, pp.41-45.
- Cotelle-Michel, L.
2004 *Les Sarcophages en terre cuite en Égypte et en Nubie de l'époque prédynastique à l'époque romaine*, Dijon.
- De Morgan, J.
1897 *Carte de la Nécropole Mempite: Dahchour, Sakkarah, Abou-Sir*, Le Caire.
- Daoud, K., Farag, S. and Eyre, C.
2016 “Nakht-Min: Ramesses II's charioteer and envoy”, *Egyptian Archaeology 48*, pp.9-13.
- Eriksson, K.O.
1993 *Red Lustrous Wheel-made Ware*, Jonsered.
- Hawass, Z.
2011 *The Secrets from the Sand: My search search for Egypt's past*, Cairo.
- Holthoer, R.
1977 *New Kingdom Pharaonic Sites: The Pottery*, Copenhagen, Oslo, and Stockholm.
- Kawai, N.
2012 “The tomb of Isisnofret at Northwest Saqqara”, *Abusir and Saqqara in the Year 2010*, Prague, pp.497-511.
- Köpp, H.
2009 “Die Rote Pyramide des Snofru in Dahschur - Bemerkungen zur Keramik”, in Rzeuska, T.I. and Wodzinska, A. (eds.), *Studies on Old Kingdom Pottery*, Warsaw, pp.61-69.
- Lecuyot, G.
1996 “La céramique de la Vallée des Reines, étude préliminaire”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne 4*, pp.145-161.
- Lepsius, K.R.
1849-1859 *Denkmaeler aus Aegypten und Aethiopien: nach den Zeichnungen der von seiner Majestät dem Koenige von Preussen Friedrich Wilhelm IV nach diesen Ländern gesendeten und in den Jahren 1842-1845 ausgeführten wissenschaftlichen Expedition*, 12 vols., Berlin.
- Lilyquist, C.
2003 *The Tomb of Three Foreign Wives of Tuthmosis III*, New Haven and London.
- Ago, F., Bresciani, E. and Giammarusti, A. (eds.)
2003 *The North Saqqara Archeological Site: Handbook for the Environmental Risk Analysis*, Pisa
- Marchand, S.
2009 “Abou Rawash à la IVe dynastie. Les vases en céramique de la pyramide satellite de Rêdjédef”, in Rzeuska, T.I. and Wodzinska, A. (eds.), *Studies on Old Kingdom Pottery*, Warsaw, pp.71-94.

Martin, G.T.

1991 *The Hidden Tombs of Memphis: New Discoveries from the Time of Tutankhamun and Ramesses the Great*, London.

Mathieson, I and Ditter, T

2007 “The Geophysical Survey of North Saqqara, 2001-7”, *Journal of Egyptian Archaeology* 93, pp.79-93.

Myśliwiec, K.

1987 *Keramik und Kleinfunde aus der Grabung im Tempel Sethos' I. in Gurna*, Mainz am Rhein.

Quibell, J. and Hayter, A.G.K.

1927 *Excavations at Saqqara: Teti Pyramid, North Side*, Le Caire.

Roehrig, C.

2005 *Hatshepsut from Queen to Pharaoh*, New York.

Tawfik, S.

1990 “Recently Excavated Ramesside Tombs at Saqqara. 1. Architecture”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts abteilung Kairo* 47, pp.403-409.

Youssef, M.

2011 “Die Ausgrabungen südlich des Grabes des Nachtmin in Sakkara-Nord”, *Sokar* 23, pp.84-89.

Wodzińska, A.

2007 “Preliminary Ceramic Report”, in Lehner, M. and Wetterstrom, W. (eds.), *Giza Reports, The Giza Plateau Mapping Project, Volume I*, Boston, pp.283-324.

Zivie, A.P.

2008 *The Lost Tombs of Saqqara*, Cairo.

吉村作治、河合 望、柏木裕之、西坂朗子、高橋寿光

2010a 「第18次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第14号、早稲田大学エジプト学会、pp.14-48.

吉村作治、近藤二郎、河合 望、柏木裕之、西坂朗子、高橋寿光

2010b 「第19次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第14号、早稲田大学エジプト学会、pp.49-59.

エジプト学研究 第23号

2017年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.23

Published date: 31 March 2017

Published by The Japan Egyptological Society

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Egyptological Society